



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〈木戸孝允〉を支えた女：幾松の「維新」と「復古」
Author(s)	高橋, 小百合
Citation	研究論集, 16, 85(右)-100(右)
Issue Date	2016-12-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.16.r85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63920
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_017_takahashi.pdf



〈木戸孝允〉を支えた女

——幾松の「維新」と「復古」——

高橋 小百合

要 旨

本論文は、明治期における木戸孝允と幾松に関する言説を、二人の関係性の描写から分析し、同時代の男女交際論等、男女関係についての思潮をふまえながら、文化史中に占める二人の描写の位置および意義について考察したものである。論者には『日本近代文学会北海道支部会報』一九号掲載予定の別稿「〈木戸孝允〉像の生成」があり、ここでは木戸孝允が死去から明治末年までのあいだ、どのように語られていったのか、その変容と文脈パターンについて論じた。本論文では、そこで見出した六つの文脈パターンのうち、以後、大正、昭和期とより重要性を濃くするであろう〈木戸と幾松〉へ幾松あつての木戸について一歩踏み込んだ論放を展開したつもりである。本論文の第一章「木戸表象の傾向と類別」は、木戸を語る文脈パターンについてまとめ、右の別稿の内容を引き継いだかたちである。よって、本論文の核は第二章以降にあるといえる。幾松はなぜ、木戸を語る言説のなかで存在感を増し、大衆的歓迎をうけたのか。第二章では、木戸と幾松の関係が、近代的恋愛の文脈に読み替え可能であることを論じ、同時に、幾松の芸妓という出自に着目して、近代と前近代の微妙なあわいに、ふたりの「恋愛」があることを明らかにした。第三章は、一方で二人の関係表象がもつ「復古」性について論じている。「王政復古」「二君万民」のイデオロギーとからめながら、へ尊いから尊いへカミの論理で語られる木戸と、太古、国運を占う巫覡でありえた（元）芸妓幾松との関係が、国生み神話に準ずる「復古」の国づくりを表徴しうると指摘した。幾松あることによって、木戸のイメージは①愛妓とついに恋愛結婚を遂げた ②勤王の志士・桂小五郎として定型化していく。それは同時に〈近代〉化と〈復古〉の二律背反、あるいは混淆を示す営為でもある。これこそ、日本の〈近代化〉の姿そのままであり、本論文のもっとも強調しておきたいところである。

はじめに

明治という時代は、つねに同時代とそれをもたらした明治維新とを、巨細に観察し、批評しつづけた時代であった。同様の営為はいつの時代にもあろうけれども、明治期においては、維新と現在とを結ぶ文脈の創出に、知識人たちはほとんど腐心していたといつてよい。それはまず維新の意義づけにはじまり、かくある維新の理念に對して現在の政体、思潮は正か閏かという議論に発展していく。維新とは何か、〈明治の御世〉とは何かを絶えず内省し、それらの造型、また両者を語る文脈を再生産しつづけた時代であったといえよう。

そうした模索の対象、および題材は、人物にもおよんでいる。

が、明治期より現在までつづく維新时期の人物表象について、その変化・変容をたどる試みは、吉田松陰論研究¹⁾等において夙にさかんである一方、他の〈志士〉については戦前と戦後の表象の差が粗々に考察されている程度である。本稿は、なおざりにされている観のあるかれらへのこれまでの歴史的まなざしを検めるため、木戸孝允(天保四(一八三三)年〜明治一〇(一八七七)年)を語る言説に注目するものである。

木戸は維新时期と近代とを結ぶ「元志士・現大臣」のなかでも高名であり、かつその比較的早く訪れた死のせい、伝記類の編纂が明治初期のうちから盛んであった。よって明治から現代までの表象の比較という点で、有為の題材であるといえる。さらにいわゆる「維新三傑」のひとりであるからは、木戸を語る言説には維新を語り、

明治を論ずる言説における一典型が示されているとみるべきではないか。

本稿では特に、明治期における木戸と愛妓幾松(のちの木戸夫人松子、天保一四(一八四三)年〜明治二〇(一八八七)年)との関係描写について考察していく。

木戸を語る言説には、ある時期から幾松についての記事比重が増えていく。なぜ人々は幾松に関心を寄せ、それらを享受したのか。幾松と木戸をめぐる語りの変化・変容によって立ち現れてくる〈近代性〉の一面を検証したい。

一、木戸表象の傾向と類別

明治期における木戸表象の型を、論者は試みに六パターンに類別した。それらの詳しい論証については別稿に譲るが、結論を先取りするならば次のような項立てが可能である。

1、『木戸公小伝』前後

木戸の一代記の編纂はその死のわずか二日後、明治一〇年六月二八日より『東京日日新聞』連載の「木戸公小伝」(同六月四日)をもって嚆矢となす。

同作は、小編ながらも木戸の周辺史料を摘要し、よくまとまっていたためであろう、その後あたかも換骨奪胎の相を見せて、多くの木戸伝に引用、あるいは剽窃された。同作とその孫子たちに共通す

るのは、木戸を語るにあたつての羅列的な勲功叙述と、文脈の不明瞭さである。すなわち、桜痴らの語る木戸像には一定した文脈が存在せず、木戸の〈勲功〉を語るにあたつても、そのときどきで（たとえば勤王の忠臣だとか開明的政治家だとか）評価軸が揺れ動いているのである。が、むしろこれは生身の人間を語ろうとすればあたりまえにおきる現象であつて、そのことによつて『木戸公小伝』やその類似作の論攷レベルが疑われるということにはならないであらう。

2、「壮士」として

明治一〇年代の自由民権運動隆盛期、坂崎紫瀾『汗血千里駒』²にみるように、維新志士はしばしば民権「壮士」になぞらえられた。木戸もまた「壮士」たる資格は殆いながらその列にかぞえられており、「古壮士 木戸孝允」などと題した文献が遺されている³。

3、王政復古論への援用

明治政府が「創業」から「守成」へと成長を経るにあたつて、為政者たちは維新を「百事一新」から「王政復古」の文脈へ読替えしむるため、さまざまな言説を発表する。そうして前時代（前項）のような「革命」的言説は淘汰されてゆく。木戸を語る言説においても、特に日露戦争後にその傾向は顕著であり、のちに定型化する〈勤王の志士・桂小五郎〉像の典型を、ここにおいてみる事ができる。

4、立志伝への影響

明治三〇年代から四〇年代にかけて流行した「立身出世主義」に、木戸表象もまた無縁ではいられなかった。折しも濫造されつつあった立志伝中の人気ヒーロー、豊臣秀吉や伊藤博文⁴のように、木戸は微賤の出ではなかったが、母の死を契機に勉学に目ざめるエピソードなどは、少年向けの読み物に何度か採録を重ねられている。

5、近代史的伝記

明治一〇年代以降、重野安繹や久米邦武らのリードによつて、従来のイデオロジカルな史書や通俗的史談とは異なる実証主義に基づいた近代史学が形成されていく。渡辺修二郎『木戸孝允』『木戸孝允言行録』⁵もそうした流れのなかでとらえられるべき言説であろう。両編はほぼ徹底した史料主義、客観主義で貫かれており、そのため全編の文脈は（〇〇であるべき」という先入主が不在のため）いささか不鮮明である。あるいは1で紹介した『木戸公小伝』の、これが嫡系とよべるのかもしれない。

6、幾松の登場と活躍

明治期における木戸孝允表象の分類は、最後にようやく本稿の主題にたどりつく。

木戸に関する言説には、明治二〇年代後期から、あらたな流れをみることが出来る。愛妓幾松の存在感の増幅である。

京都三本木の芸妓であつた幾松は、のちに木戸夫人松子となり、

夫の死後薙髪して、明治二〇年に没した。正夫人であるところから本戸伝にもしばしばその名が見え、桜痴の「本戸公小伝」にも「禁門の変以後も——引用者註）公猶未ダ京城ヲ棄ルニ忍ビズ殆ド危禍ニ瀕セントス時ニ〇〇子（即チ未亡人）三本木ニ在リ俠慧ニシテ節アリ身ヲ以テ公ヲ庇フ因テ纔ニ免ル」とある。が、いわば台詞なしの端役であった一〇年代にくらべて、二〇年代以降の出版物では「身ヲ以テ公ヲ庇フ」た具体的なエピソードが登場し、「勤王芸者」幾松のあざやかな活躍ぶりを示している。

此の幾松は賤しい芸妓としては感心なもので勤王家の志ざしを知り座敷へ出ても幕府の役人などと座敷も碌に勤めないで俄かに病氣だといつて帰つて来るといふ性質でございます。（中略）足音がいたしますゆゑ刀を持ったなりに小五郎は（幾松とその母がかねて昼の下へにこしらえておいた——引用者註）隠れ場所へ這入る畳を敷て仕舞ひ何食はぬ貌をしてゐる所へ目明しの文五郎子分を一人連れて這入つて来まして（中略）文「昇つちやア居らねへ少し聞てエ事があるが此間三条の池亀で汝が呼ばれた客は長州の桂小五郎といふ人ぢやアねへか」幾「ハイ池亀へいつたのは芸者衆ばかり七八人でお客と云ふたら御武家さんが一人町人さんが一人何の馴染もない御方でございまして桂さんと仰やいますか確かに私は存じません」〔6〕

折柄表の戸を、ドン／＼／＼ドシンと、はげしく叩くものがあ

る『こらッ……幾松』声は慥かに武士のやうだ、幾松は疾くも、ふツと行燈の火をふき消す、表では益々はげしく、戸も割れるばかりに打叩く、桂は夜具戸棚へ這入むだ。（中略）

幾松は度胸を据へて、戸締りを脱す、待つ間も遅しと、各自抜身の儘ま、ドヤ／＼／＼と闖入する、幾松は立塞がつて『マア、お待ちなはれ、貴君方は何といふことや、他の家に……』『エー黙れッ……桂が居ろう、桂を出せッ』『桂はんは此頃、きついお見限りで、ちやツとも来やはりまへんがな』『嘘を申すと許さんぞ』『大概他に増花の出来やはつておいでが無いのぢやろと思ひやすと、口惜しうて／＼なりまへんが』『何だ、惚けとは怪しからん今迄二人で話して居つたろう』『そりや話は仕て居りました』『誰か、その對手は』『一人で』『その一人は誰か』『どツちやも妾じやがな』『馬鹿なッ、一人で話が出来るか』『そりや出来すわ』『蔭膳すゑて二人のつもりで、話は一人で掛持だす、オホホホホ』『飽迄も人を嘲弄した、武士を武士臭しとも思はぬ、女としては大胆な態度』『よし、家捜しするぞ』（中略）『もし、家捜し仕ても桂はんが、居やはらなかつたら、何と仕なはる』『居らねば、それまでのことぢや』『それは卑怯や、おまへんか』『卑怯とは』『女ばかりの家へ、立派な武士はんが、しかも夜中にふみ込んで、家捜して思ふ人が、居やはらへんから言ふて、黙まつて帰りやはつては、第一お腰の刀に對して、すみすまいがな』『理の当然に武士はグツとゆきづまる、』〔7〕

これまでにみてきた木戸に関する言説は、ついに木戸らしき——彼を端的に示すなんらかの記号性を創出しなかったようにおもえる。

たとえば、西郷隆盛は仁者として知られているし、西郷を「殺した」大久保利通は冷酷なりアリストというイメージで語られる。さらに下の世代の伊藤博文は女、井上馨は金と、より明確で即物的な「らしき」を獲得している^{『3』}。けれども木戸はいえ、先にふれたように、開明的であつたり守成派であつたり、壮士であつたり復古の功臣であつたりと、あらゆる党派のあいだを揺れ動いている。いずれの派もが、みずからの朋党あるいは先達として木戸の行跡を援用しており、かつまた本来ひとの一生というものは統合的な性格をもつものではなく、あらゆる文脈の指定が可能でもある。木戸の造型はそうした曖昧さと多様性のなかに、ごく自然におかれていたということができよう。

これらの言説は、木戸が偉人であるということが所与の前提となっている。つまり、偉人であるところの木戸が、たとえば立憲政体の祖である（と語り手が仮定する）から、立憲主義を唱える自分（＝語り手）たちは正しいのだ、という論法である。そうしてまた同時に立憲論者であるから木戸は偉いのであり、「木戸＝偉人」というところから発して、理由と結論とはたがいにくるぐると環をなすつづけるのである。

こうしてみると、木戸孝允を語る言説は、物語としての発展性をうしなつたかにみえる。が、のちの大佛次郎『鞍馬天狗』^{『4』}などにあ

きらかなように、木戸は大久保や伊藤よりも濃厚に「物語」のなかの人物となつた。それを後押ししたもののこそ、幾松の存在とそのキャラクター化の強化であつたと論者は考えている。

右のような幾松の表象の変容は、ひとつには当人が物故したことが理由であろう。また、佐伯順子が『明治美人論』^{『5』}で述べているように、「明治のメディアにはさまざまな女性たちが登場する」（三頁）ようになつこと、なかでも女学生ブームとならんで、あるいはそれに先んじて「ゲイシャ」や華族夫人・令嬢といった女性（佐伯が「セレブ」と呼ぶところの）が注目されたことも指摘できる。幾松は佐伯の謂う「セレブ」（フーブル、とも言い換えらるべきか）女性とは出自からして違っているが、顯官の妻であり、明治二〇年前後のいわゆる鹿鳴館時代において、もし彼女が夫とともに存命していたならば、「貴婦人」として脚光を浴びた伊藤博文の妻梅子や、大隈重信の妻綾子（いずれも前身は芸娼妓）らの列に加わっていたことは疑いない。だが、しだいに幾松が人気を博していった背景には、もうひとつ、時代性を顯す重要な意味をみることもできるのでないか。すなわち、男女交際論の胚胎と流行である。

次章では、木戸と幾松をめぐる言説に、時代言説としての男女交際論がどのようにかわりあっているかを考えていきたい。

二、〈幾松ブーム〉の時代性

1、男女交際論の流行

明治初期の日本に男女交際の機会がきわめて限られていることを指摘し、それによって近代国家としての資質に瑕疵を認めざるを得ないと慨嘆したのは福沢諭吉であった^[1]。

よく知られていることだが、その著「男女交際論」において福沢は、男女の交際に文字どおり肉のまじわりをなせる「肉交」と、両性が互いの人格をみとめあつてする「情交」との「二様の別」を見出した。注目すべきは、ここで福沢が両者に偏倚あるべからざる対等の価値をあたえている点である^[2]。

実際に福沢が同論を発表した頃、時の文部大臣森有礼（在期明治一八～二二）の働きかけによって、男女交際はにわかにさかんになっていた。

女性、ことに新しい世代の女性たちに「優美よりは快活、柔軟よりは才発、家事よりは社交、手芸よりは学術」を「注文」した森の施策に影響されて、同時の男女学生の交際ぶりは後代と較べても自由、見様によっては放恣なものであったという^[3]。

こうした風俗と、何より福沢の提唱した〈「肉交」「情交」等価値推進論〉に猛然と反撥したのが巖本善治であった。巖本は、「男女をして彼の不測の罪惡に墮落せしめざるやうに」「可成く清潔なる男女交際の方法を實行せしむる」のが「先進者」の義務であるとして、男女交際からの「肉交」の排除を主張した^[4]。なお、「男女交際」とよ

ばれる行為のうちには、鹿鳴館社交や、のちに発足する「男女交際会」^[5]のような既婚男女間における「清潔なる」（？）交際をもとにきにとめるが、本稿ではおもに未婚男女間の、「異生相引くの働」によって醸される一連の交流を指すこととする。

さて、右のように白熱した〈「肉交」「情交」軽重論〉がどのように決着したかという点、当時の思潮は概ね巖本に味方したようである。一八世紀から一九世紀にかけて英米で普及した「ロマンチック・ラブ」の概念が流入したことも大きいであろう。デビット・ノッターによれば、近代家族像の理想型である「ホーム」概念——夫婦は深い愛情によって成立し、持続するべきだという——が英米を中心として同時期に勃興し、やがて「ロマンチック・ラブ」と結びついた。

これをうけて日本でも「家庭」と「恋愛」は「密接なもの」とする言説が溢れるようになった、という^[6]。たしかに北村透谷が、「厭世家が恋愛に對すること常人よりも激切」でありながら、その恋愛が成就してひとたび結婚してしまえば、「人世の羈束」がかれらを「失望」させるのだと歎き^[7]、泉鏡花もまた、「婚姻は蓋し愛を拷問して我に従はしめむとする、卑怯なる手段」にして、しかしあえて人々がそれをするのは国家社会のためであると極言してみせたにもかかわらず^[8]、加藤秀一が指摘するとおり、その後の恋愛論、結婚論の多くは「やがて倦怠が生まれることや、また家政や親類縁者とのやりとりといった「実世界」のしがらみが関わってくることに目をつぶり、婚前（あるいは非婚）の恋愛に情熱を燃やし尽くすよりも、家庭を築き、「結婚生活の安寧」を守るほうへ傾いていった^[9]。「人

の幸福は家内の平和だ、家内の平和は何か、夫婦が互に深く愛すると云ふ外は無い」という尾崎紅葉『金色夜叉』²⁰や、「親類縁者」の「しがらみ」に間を堰かれながらも、夫婦が互いに「倦怠」することなく愛情を育みつづける徳富蘆花『不如帰』²¹の流行は、世人の「夫婦愛」への憧憬を語ってあまりある。

それでは、以上のような ①教育ある男女の間に ②「清潔」にして ③結婚と幸福な家庭生活へつながる 男女交際が慇懃された時代、しかもそれにいささか先だつて、幾松はなぜ、木戸を語る言説の中で活躍の場をひろげたのか。前章で論者が紹介してきたのは、ほぼ木戸を讃仰する言説群であるが、それらのなかで幾松に筆が割かれるからは、彼女もまた、木戸の偉大さを補強する人物であらねばならない。木戸と幾松との交際は、右のような時代性を背景として、どのように「理想的」に読み替えられるだろうか。

明治期の幾松表象に共通する特徴として、機知に富み、勤王びいきであり、「節ア」る女性であることが挙げられる。彼女は無論英語を操る女学生連に代表されるような、近代的教育をうけた女性ではないが、勤王思想という「正義」を重んじる志操と、男性と対等にわたりあえる知性をもった賢婦である。これは先に挙げた条件の①に代入することができよう。さらには、職業柄完全な「清潔」さは望めないにもせよ、不見転とはちがう貞淑な女性であり、木戸に対しての操は堅固なものとされる②。そして何より、維新後二人は正式に結婚し、公の行事に揃って出席したり、友人、知人からも私的に招かれるなど、夫婦睦まじい姿を認められ、かつ期待されてい

る。③²²。

また、繰り返しになるが、「勤王家の志ざしを知る幾松は木戸の同志でもある。この点、『当世書生気質』にみるような、「女色に溺るよりは龍陽に溺るるはうがまだえいワイ。第一互に智力を交換することも出来るしなア、且は将来の予望を語り合うて、大志を養成するといふ利益もあるから。」²³といった「なんで女が知るものか」式のミソジニーからの脱却を示す一方、賢婦たるもの勤王思想を正義として理解すべし」という偏った（女性）教育論の片鱗をのぞかせてもいる。

ともあれ、かくして木戸と幾松の交際描写は、木戸の「偉大さ」を翳らせることなく、男女交際論の世の中を先取りし、かつ歓迎されることが可能になるのである。

2、芸妓としての幾松

幾松に関する言説を検討する際に、見過ごしてはならないのは、それらが彼女の芸妓という素性（あえて「職業」ではなくこのように書くが）をどのように処理しているかという問題である。

前章で引いた『木戸孝允君之伝』は、「此の幾松は賤しい芸妓としては感心なもので」と紹介する。なるほど近代とは、芸妓が極端に卑しまれるようになった時代であった。

享保期の粹人柳沢淇園は、娼妓の美しさと性的熟練を尊び、彼女らを「女郎さま」と呼んだ²⁴。近世期、芸妓は「地女」とは全く違った魅力をもつ、異界の美女とされていた。男性は「地女」には

求め得ない粹と色とを「女郎さま」に見出していたのである。

近世期、芸娼妓は蔑視されていたというよりも、地女と明確に棲み分けられていたのである。長州藩の御用商人であった今井太郎右衛門の息子（同名）の談話にも、次のようにある。これは差別ではなく（なぜなら幾松は今井家への出入を禁じられてはいない）、区別の例証といえよう。

木戸公の夫人翠香院は、若狭小浜藩の小臣の出である。京都三本木の楼主に貰はれて本名をお松といひ、芸名を幾松といったのである。祖母の話にお松さんは、公が私の宅にゐられる中に、半ば芸者の風で、逢ひに来られたさうである。そこで祖母が一日、お松さんの身元を尋ねたら、公は其の素性をよく話された。祖母は今後私の宅に来られるなら、武士か町人の娘に装うて貰ひたいと注意をした。それから芸者の姿を変へて来られたさうである。²⁵⁾

しかし、維新の訪れとともに芸娼妓は「地女」、それも身分ある男たちの妻の座へ分け入りはじめる。後年、長谷川時雨は、こうした現象をさして、維新の乱世の英雄たちがよんどころなく折んだ道を、他の有象無象がこぞって真似したためだといって眉を顰めた²⁶⁾。

芸娼妓は賤しい。芸娼妓を家庭に容れるのは乱倫の基。その認識はあきらかにマリヤ・ルーズ号を契機とする、明治五年一〇月の太政官布告第二九〇号（芸娼妓解放令）、当時のいわゆる「牛馬切りほ

どき例」が根底のひとつに据わっているであろう。

明治二〇年代以降、幾松がにわかに脚光を浴びた背景には、坪内逍遙『当世書生気質』に曰う、いわゆる玉の輿に乗った芸娼妓への「目ひき袖ひき」的好奇心もはたらいていたであろう²⁷⁾。しかし、木戸を称揚する言説に、語り手たちがわざわざ「芸妓・幾松」の挿話をひっぱりこんできたことには、野次馬根性以上の意義を見出しえないのだろうか。

長谷川時雨は奇しくも「明治期は、芸者美が代表していた」といった。いかにも明治という時代は、芸娼妓を侮蔑しつつ、その美をもつともさかんに享受した時代でもあった。明治初年、「ゲイシャ」たちが美人の代表としてメディアの注目の的となり、やがて「醜業婦」と蔑まれながらもなお、明治末年までもポスターや絵葉書のモデルとして活躍しつづけた経緯は、佐伯順子『明治「美人」論』（前掲）に詳しい。小栗風葉『青春』²⁸⁾には、大学生関欽哉が芸者を写した絵葉書を持っているのを、友人の妹に非難される場面がある。そのとき関は、「醜業婦だつて美しいものは美しいでせう。」（前略）我々は唯目に映じ、心に写る処の美其物を翫賞すれば可いと思ふんですな²⁹⁾と答えている。そうして「翫賞」と彼自身がいうように、関が恋愛相手に選ぶのは「醜業婦」ではなく、折からブームであった「女学生」小野繁である。

一方で、先の読み替えの論法をふたたびもちだすなら、芸妓の職能は森有礼が新時代の女性にもとめた「快活」と「社交」を備えている。さらに、男女交際の文脈を用いるとすれば、「酒は正宗、女は

万龍」とまで謳われた赤坂の「日本一の美人」芸妓万龍が、東京帝国大学の学生と、ドラマチックかつロマンチックな恋愛と結婚を遂げて新聞紙上を賑わせたのは、明治末から大正初年にかけての頃である³⁰。「ロマンチック・ラブ」と「ホーム」のイデオロギーに、芸妓が参入することも時に可能だったのである。

芸妓としての幾松は、差別と憧憬、理解と好奇心という、前時代と近代とを往来し、定まりなくなつたよう視線に晒されている。彼女はときに「快活」と「社交」を体现する新しい女であり、時にまた恋に命を懸ける人情本の中の女である。近代性と前近代性とのあわいに、芸妓としての、また男とかかわる女としての幾松像は造型されているといえよう。

三、木戸と幾松の復古性

1、近代的恋愛との差異

これまで論者は、木戸孝允と幾松の関係表象が、当時の男女交際論を用いつつ、〈近代的偉人〉の文脈に読替え可能であることを述べてきた。

しかし、木戸と幾松はたしかにどこかで、近代性の文脈への回収を拒んでいる。

明治の青年たちの恋愛には、「煩悶」がつきものである。もとは人生をいかに生きるべきか、人とは何か、という哲学的問題に対する懊悩を示していた「煩悶」の語が、しだいに恋愛の悩み、すなわち

この愛をいかに成就すべきか、あるいはこの愛に突き進んでよいものか、というきわめて限定的な使用法へと変化していった間の事情は、平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌』³¹に詳しい。

小杉天外『魔風恋風』の夏本東吾は、恋人初野に向つて「貴女は、始終両立しない考へを持つて居るんだ、詰り好きで煩悶しているんだ、僕との約束を維持するか、芳江の友誼に犠牲となるか、孰^{どう}でも一方に決めなきゃ可かん……、それなのに貴女は……。」³²と言い、当時の教育者は「青年男女の厭世煩悶平たく云へば恋愛の二字に外ならずと存じ候、名を煩悶とか厭世とかいふに借りて表面を飾る手段と察せられ候。之を救ふの一方は男女自由交際を廃し、其根本を断つの外致方なき様存候。」³³と肩をいからせている。

こうした恋愛の「煩悶」の多くは、その愛がもつなかにがしかの禁忌性によつて生じる。『魔風恋風』『青春』はともに許嫁のある相手との恋愛であるし、『不如帰』は姑という権力が夫婦を離別させる。

ところが、木戸と幾松の間にこうした禁忌性にとまなう「煩悶」は描かれない。木戸の両親は既に亡く、また乱世の非常時ゆえに、芸者との関係について喩をはさむ者はない。無論、常に命を狙われていた木戸であるから、二人の間に試練はある。けれども、二人は恋闕の至情を同じくする者であり、互いの恋愛の障碍はすなわち「勤王」の敵——幕藩制度という害悪である。悪を滅し、克服することでは愛は全うされる。この点、他の恋愛小説等の文法とはちがうところである。

が、社会改革や社会正義と一体になった愛、というパターンは、

何かに似ているようでもある。明治一〇年代に流行した政治小説がそれである。

当時民権思想的言説の最右翼であった政治小説において、危難に遭う国士と、彼を輔ける情人とが一对のヒーロー・ヒロインとなっていた。立憲政体の祖、君民共治論者としての木戸とその愛妾幾松もまた、こうした型を襲って描かれているかにみえる。

けれどもここで注目しておきたいのは、明治二〇年に発表された、徳富蘇峰「近来流行の政治小説を評す」³⁴という小文である。

蘇峰は政治小説の主人公の多くが、支援者となりうる女性に慕われ、自らは勞せずして彼女の力で成功することを嘲り、「彼等は所謂政治世界の「丹次郎」なり、」³⁵と批判している。もとは市井人である政治書生たちが情人の力で「出世」していく物語には、たしかに射幸的な側面が指摘できる。しかし、木戸と幾松を語る言説群は、一見そうした「成功」物語の型を履んでいるようにみせながらも、蘇峰の曰うような「政治世界の『丹次郎』」を描出してはいない。

木戸はそもそも微賤の出とはいえず、大江姓をもつ勤王の「名門」出身であった。乙巳の変にはじまる彼の不遇の時代は、いわば貴種流離の時期であり、その少年期に皇室が衰微していたことと二重うつしになっている。これは前章において述べたことだが、木戸を語る言説においては、徐々に「木戸＝勤王の志士＝正義」という文脈が固定化されており、さらに語り手たちはその文脈の保証する社会（体制）のなかに生きている。とすれば今は「流離」している木戸だとしても、いずれ「正義」の回復とともに、復権する日は（物語構

造として）約束されているのである。さらに幾松もまた、もとは武家の娘とされており³⁶、この点も、流謫の地で「下流」に身をやつした貴婦人と出会う貴種流離譚の典型に一致している。ただ、王朝風の物語とちがっているのは、とりまなおさず幾松の主体性とダイナミックな活躍ぶりである。論者はこうした点をふまえて、明治期における木戸孝允と幾松をめぐる言説群に、「復古」というキーワードを見出すことが可能ではないかと考えている。それは単に前近代性の残滓をみとめるとかいう意味ではなく、もつと積極的に大胆な、「神武創業ノ始ニ原」く文脈の認証である。

2、「復古」の体現者として

木戸孝允を語る言説のなかで、幾松が徐々に活躍の度を増しているころ、かれらの生きた幕末・維新时期を観る思潮は、一章の3に示したような変化を帯びはじめていた。

「近代天皇制支配の正当性を史料を通して明らかにしようとした」³⁷『復古記』編纂が完了したのは、明治二年のことである。「天皇制支配」という語にはあるいはいささかの語弊があるうけれども、ともあれ記紀神話を根拠に、一君万民思想に基づく国体論が、公の史書として完成したのである。

王政維新論の文脈のもとでは、木戸が復古の功臣として語られていることはすでに述べた。そうしてできあがった「勤王の志士・桂小五郎」像は、明治後期から大正、昭和、そして今日にいたるまでなおあらゆる言説のなかに登場し、再生産をくりかえしているのだ

あるが、その造型の復古的側面には、やはり幾松が深くかわつて
いると考えられる。

少し論が迂路を辿るが、ここで厨川白村『近代の恋愛観』につい
てふれておきたい。

大正期、「恋愛至上」主義を高らかに謳いあげ、大流行した同作は、
「精神と肉体と両方からの完全な全的人格の結合を個人と個人と
の間に見る事は、恋愛生活の外には断じて有り得べからざる事だ。
両性の肉体的結合には、他の何者とも比すべからざる絶大なる精神
的意義の存する事を知らねばならぬ」として、恋愛は肉と霊との両
方の働きによつて完成されると説いた³⁸⁾。

さらに、白村は曰う。

ところが独り第三の恋愛至上の理想主義「第一」の「理想主義」
は「民族反争」の解決、同「第二」は「階級闘争」の解決——引
用者註）に至つては、是だけは決して外国から植ゑ附けられた
者ではなく、立派な誇る可き日本の国産だ。吾々日本人の祖先
の時代からして持つてゐる固有の思想である。

（中略）古代の諸民族は、之（性的関係）——引用者註）を罪
なりとして見るか、然らずんば原始宗教の或者の如くに、無闇
矢鱈に性的関係を神聖視するのであつた。神わざだと思ふか或
は罪惡視するかの、いづれかの謬見と僻みを脱し得なかつた。
然るに独り吾等日本人の祖先だけは是等と全く異つて、素直に
自然の儘に正しく人間らしく、人生に於ける性的関係の意義を

観てゐた。記紀万葉にあらはれた恋愛観は他の外国民族の場合
に見る『原始的』とは甚しく趣を異にしてゐた。儒仏の外来思
想輸入前の日本人の恋愛観は、全く格的なる霊肉一致のもので
あつた。性的恋愛に於てはじめて人生の意義を味識し、大胆に
恋愛至上の思想を歌つた者は、日本上代の歌謡に最も多いので
ある。之を天地創造神話に見るも、その恋愛観は、基督教マホ
メット儒教仏教などのすべてと異つて居た。事あたらしく言ふ
迄もなく誰しも知つてゐる話だが、祖宗二はしらの神が『あな
にやし愛乙女を』『あなにやし愛男を』と互に呼ばれたとき、そ
れは絶対至上の恋、即ち性を異にした二つの魂の渾融冥合を語
れるに外ならないではないか。

この神話によつて代表せられた我国固有の生活理想は、有史
時代即ち万葉詩人の時代に入つても異なるところは無かつた。然
るに平安朝あたりから、支那の儒教思想——即ち女と子供とを
極度に侮蔑し無視した孔子教の思想に誤まれ歪められて、そ
こに王朝文学に現はれた頹廢的傾向を生じ、更に仏教から來た
禁欲主義が、あたかも清教徒の嚴格主義のやうに、再び日本人
固有の生活理想を歪めて今日に及んだ。³⁹⁾

先にも述べたように、木戸と幾松の間柄は、巖本善治が説いたよ
うな「清潔なる男女交際」ではありえなかつた。それを前章では幾
松の貞淑さという造型に着目して、〈近代的〉価値のもとに説替える
ことを試みた。けれども、木戸と幾松の「性的関係」をありのまま

に肯定してみると、そこにはまたまるでちがった文脈の措定が可能となるのではないか。

白村が同著をものしたのも、それが歓迎されたのともに大正期のことはあるが、その土台を支えているのは、〈夫婦愛〉理想を謳った明治後期の言説群だと考えてよいであろう。

「恋愛至上」主義が果たして「日本の国産」であるかどうかという問題は今は措く。ただ白村は「恋愛」に「我國固有」という名の正統性をあたえた。「恋愛至上」主義は日本人が古来の思想に立ち返ること、すなわち復古の営為として読むことができるのである。「近代天皇制支配」の時代性と照らし合わせて（白村自身はリベラリストといえるが）、これは重要なさけびであろう。

右のイザナギ、イザナミの例にみるように、神話世界において、媾合はすなわち国生みであった。そして神々の妻たちは、男女の「肉交」と「情交」を通じて、国造りの輔弼をおこなう。オホナムチノカミとスセリビメ、ホヲリノミコトとトヨタマビメ、ヤマトタケルノミコトとオトタチバナヒメ、いずれの関係も然りである。

オオクニヌシが各地の国神の女たちと交わったのが、単なる好色ではなく、その土地の支配を意味しているように^{〔40〕}、王臣である木戸は、「勤王芸者」幾松との交情によって、「復古」への足がかりを築いていくのである。

古代において、巫女と芸娼妓とはその存在・職分共に、明確に分かちがたいものであった。「木戸公小伝」以来、幾松についての語りは、のちの高官婦人である彼女をなるべく淫佚なイメージから遠ざ

けておきたい意図があったのだろう、一様に彼女を芸妓時代から「節アリ」、あるいは物堅くて知られていただとか、男ざらいだとかいう表現を用いている。その背後にはうたがいがなく、芸妓に対してこれを醜業婦であるという、明治期以降盛んになった「玄人」女性への否定的感覚と、女性解放論がはたらいっている。が、こうした〈芸妓にして而も高節である〉との言説を、「神武創業の始に原」く王政復古を果たした志士の愛妾にあてはめてみると、かえって芸娼妓Ⅱ醜業婦という新思潮から、芸娼妓Ⅲ巫覡という神代への「復古」が懲慚されてはいないか。

およそ「王政維新」にかかわる言説は、近代化を主張しつつ、どこかで近代を拒んでいる。幾松は「勤王芸者」として、汎く世人の知るところとなった。いうまでもなく「勤王」という言葉には、「復古」のイデオロギーが強力に作用している。近代性と古代性との二律背反、あるいは混淆——幾松の造型にも、それが如実に投影されているといえそうである。

ひるがえって、木戸孝允においてもまた、それまでの彼を語る文法に、神話的「復古」思想の受容と再構築はすでに準備されていた。何度か述べてきたように、〈偉人である〉ことが所与の命題となっている木戸の造型。それは、王やカミをめぐる語りにしばしまられる、〈尊いから尊い〉という論理によく似ている。

試に今匹夫匹婦に向ひ何故に帝室は尊きやと尋れば唯帝室なるが故に尊しと答ふるのみにして更に疑ふ者あるを見ず甞に匹夫

匹婦のみならず上流の士君子中或は平生尊王の志厚しと称する人物に質しても帝室は系万世の至尊なりと答へて更に詳に説明する者甚だ少なきが如し⁴¹」

尊貴であることを前提としながらその根拠をあえて問わない。そうした文法を用いる「帝室」の語りは、しばしば語る者（＝尊王を自称する者）の正当性を保証することになる。祭主がいつしか祀られる対象になってゆくのは、祭祀的空間につねにおきている現象だが、それもまた理由なき尊崇であり、そうであればこそ、「尊し」という言説のひたすな積み重ねによって、祭神の尊さは増し、祭主もまた聖性をつよめていくのである。

右の論で、「帝室」が「唯神聖なるが故に神聖なり」と云ふに過ぎないという説明では、「古代民心の素朴簡單なる世」ならばいざ知らず、「人文次第に進歩し」ていく近代にあつては「黙信に安んぜざる者もある可し」と危惧してみせた福沢諭吉は、また一方『帝室論』において、「官権ヲ拡張」し「政権ヲ強大ニスル」ために、「帝室」の「神聖」を藉りることは「毫モ異論アル可ラズ」と述べている⁴²。ひとたび深く「神聖」についての「信」を得たならば、「帝室」はそれを奉戴する側にとって、何よりも強力な守護神となりうるのである。

「尊いから尊い」という論理によって、各派にみずからの祖、あるいは朋党として語られてきた木戸は、その論理の総本山ともいえるべき尊王論で鎔われることで、いつそう似つかわしい造型を手に入れ

たといえる。事実「勤王の志士」となつてからの木戸は、幕末・維新ものの言説において急速に活躍の場をひろげている。

時代は下るが、田村栄太郎『幕末の志士 月形半平太』における木戸の登場のようすは、たとえば次のようである。

尊王の志に萌える忠義の士は、我も／＼と京都に馳せ参じ、厳しい幕府の警戒の網目をくぐり、一身これ大君のものとはかり、生命を忘れ妻子兄弟を忘れ、互いに機脈を通じ、いざといはば朝廷を仰いで征幕の兵をあげんと、心を碎きに碎いてゐるのでした。

長藩の若侍、月形半平太は、燃えるやうな尊王の志士でありました。

天下の風雲の急なるを見て取つた半平太は、ただちに京の町に姿をあらはし、桂小五郎、大久保利通なぞと交を結び、一日千秋の思ひで、錦の御旗を最先におし立て、幕府を討つべく江戸に向つて進発する晴れのその日を心嬉しく待ち侘びてゐるのでした。⁴³

桜痴や渡辺修二郎が開化、あるいは倒幕のための方便にすぎぬと曰つた勤王は、すでにゆるがすべからざる正義となつていた。桜痴や渡辺がどこか及び腰であつたり、民権論者や「成功」ブームにひきずられて確たる典型のなかつたかみえる木戸の造型は、ここにひとつの究極型を獲得したといえよう。それは勤王の大正義のため

に奔走する志士の姿であり、克艱と榮譽を約束された——つまり彼の〈正義〉を保証されたヒーローの、ひとときの冒険と苦難の物語である。

こうして多様性と雑駁さを手放した木戸像は、しかし、表現としての可能性やダイナミズムをうしなったわけではない。本章でみてきた木戸の〈復古〉的な姿は、体制的な勤王論とは、また別の位相を示すものであろう。

いまひとつ例をあげておくならば、〈勤王の志士・桂小五郎〉は、役者然とした、いささか気障な色男であることが多い。芸妓が巫覡であつたように、俳優もまた、神に仕え、神の憑代となる者である。聖と俗との混沌という古代的なおおらかさ、近代性と「復古」性との二律背反が、〈勤王の志士・桂小五郎〉と、〈勤王芸者・幾松〉の文脈においては、ときに語り手たちの意図をこえて、ゆたかに醸成されたのである。

おわりに

本稿では、明治期の言説における木戸孝允の表象に関して、愛妓幾松のそれがどのように影響しているかを述べてきた。

本稿の一章、また別稿において論じたように、明治年間、〈木戸孝允〉は単独では彼らしい——彼の特殊個性を表すに足る造型を獲得しなかった。しかし、そこへ幾松が添えられ、しかも活躍の度を増すにしたがつて、①愛妓とついに恋愛結婚を遂げた ②〈勤王

の志士・桂小五郎〉として木戸イメージは定型化していく。それは同時に〈近代〉化と〈復古〉の二律背反、あるいは混淆を示す営為でもある。これこそ、日本の〈近代化〉の姿そのままだではなかったか。

先に紹介した言説群においても、すでにその様態をあらわにしていた木戸と幾松との造型の通俗化は、このち、大正、昭和(戦前)と時代が下るにしたがつて、大いにその度を増し、特に講談や錦絵の好個の題材となっていく。それにともなつて、本稿で指摘した〈カミの論理〉は、どのように通俗化の欲望と関わりあい、発展、あるいは変容を遂げていっただろうか。それについては、また稿をあらためて論じたいところである。

また、本稿は木戸の死から明治の終焉まで三十数年をあつさりと概観し、文献的にもごく僅かの例をとりあげたにすぎない。芝居、講談、錦絵等とのメディア・ミックス的分析、またそれらを含めた後代の言説との綿密な比較検証は、今後の課題としたい。

(たかはし さゆり・言語文学専攻)

補注

〔1〕吉田松陰像の変遷については、田中彰が『吉田松陰』(中央公論新社、二〇〇一年二月)のなかで、松門出身者が頭官に就く時期から松陰が偉人とされ、それをはじめは「革命家」であつたものがいわゆる天皇制の強化のなかで「憂国忠君」の人となり、敗戦を経て「教育者」として造型されてゆく過程を検証している。

〔2〕『土陽新聞』明治一六年一月二四日〜九月二七日 連載（六〜八月は作者投獄のため休載）。

〔3〕西村天囚『天囚聞書 維新豪傑談』春陽堂、明治二四年八月

〔4〕芳洲散士『古今東西天下之豪傑奇談…一名・立身出世之種』好文堂、明治二五年三月、足立栗園『公爵伊藤博文』積善館、明治四十三年二月 等参照

〔5〕渡辺修二郎『木戸孝允』民友社、明治三〇年四月

同『木戸孝允言行録』内外出版協会、明治四五年一〇月

〔6〕桃川燕林公演・今村次郎速記『木戸孝允君之伝』東京文事堂、明治二九年九月、八七〜九一頁

〔7〕伊藤痴遊『近世名士譚』桂小五郎『忠文社、明治四一年六月、一四〜一六頁〕

〔8〕たとえば伊藤博文の場合、ハルビンでの遭難の翌月、『大阪滑稽新聞』に、「女ずきの最期」と題したポンチ絵が掲載されている（筆者不詳）。「女ずき」の姓名は記していないが、伊藤によく似た老人が撃たれてよろめく姿の影が、「女」という字の形になっているものである。

〔9〕『鬼面の老女』『ポケット』大正一三年五月——『地獄太平記』『河北新報』他、一九六五年一〜八月

〔10〕佐伯順子『明治美人論 メディアは女性をどう変えたか』NHK出版、平成二四年一月

〔11〕福沢諭吉『男女交際論』初出『女学雑誌』第二六号、明治一九年六月、『福沢全集 巻五』時事新報社、明治三一年年五月、一頁

〔12〕同一一〜一三頁

〔13〕内田魯庵『欧化熱と山田美妙』大正一四年年三月、紅野敏郎編『新編 思い出す人々』岩波文庫、平成六年二月、一五九頁

〔14〕『男女間の清徳』『女学雑誌』社説、第一六八号、明治二二年六月九日

〔15〕中村隆文『男女交際進化論』『情交』か『肉交』か 集英社新書、平成一四年年三月、一六七〜一八〇頁参照

〔16〕デビッド・ノッター (David Notter) 『純潔の近代——近代家族と親密性の比較社会学』慶應義塾大学出版会、平成一五年一月、三四〜四五頁

〔17〕北村透谷『厭世詩家と女性』初出『女学雑誌』三〇三号、三〇五号『女学雑誌社』明治二五年二月『北村透谷全集』明治文学全集二九、筑摩書房、昭和五一年年一〇月、六七頁

〔18〕泉鏡花『愛と婚姻』初出『太陽』第一巻第五号、明治二八年五月、『泉鏡花集』明治文学全集二一、筑摩書房、昭和四一年九月、三三〇頁

〔19〕加藤秀一『恋愛結婚』は何をもたらしたか——性道德と優生思想の百年間 筑摩書房、二〇〇四年八月、四七〜四八頁

〔20〕尾崎紅葉『金色夜叉』初出『読売新聞』明治三〇年一月〜一月『紅葉全集』第七巻、岩波書店、平成五年一二月、六八頁

〔21〕徳富蘆花『不如帰』初出『国民新聞』明治三一年年一月〜一八九九年五月、徳富蘆花 木下尚江 岩野泡鳴集『筑摩現代文学大系五、筑摩書房、昭和五二年年八月

〔22〕妻木忠太編『木戸孝允日記』明治九年九月四日条、日本史籍協会、昭和八年六月、妻木忠太編『木戸孝允文書』第四巻、明治四年一〇月一二日付西島青浦宛書翰、日本史籍協会、昭和五年六月、同第七巻、明治九年六月一〇日付井上馨宛書翰、木戸公伝記編纂所、昭和六年二月 等参照

〔23〕坪内逍遙『当世書生氣質』初出…晩青社、明治一八年六月〜一九年一月、『坪内逍遙集』明治文学全集一六 筑摩書房、昭和四四年二月、一〇三〜一〇四頁

〔24〕柳沢洪園『ひとりね』享保九年、中村幸彦、野村貴次、麻生磯次校注『近世随想集』、日本古典文学大系九六、岩波書店、昭和六〇年九月、三三頁

〔25〕妻木忠太『史実参照 木戸松菊公逸話』有朋堂書店、昭和五年四月、一〇三頁『今井太郎右衛門氏の談話』大正七年六月八日付

〔25〕長谷川時雨「明治美人伝」初出『解放』大正一〇年一〇月、長谷川時雨著・杉本苑子編『新編 近代美人伝』上、岩波書店、昭和六〇年一月、一八〇一九頁

〔27〕たとへ我國の輿論だからとて。芸者を上流にはおかないからして。芸妓をワイフなどにする者があると。兎に角賞賛ハしない方だヨ。それも町人かなかでありやア。人も彼とはいいはなないけれども。苟にも学者だとか博士だとか。將た政治家とかいはれる身分で。身元もわからない芸妓のたぐひを。直に其ワイフにしたといへバ。目ひき袖ひきして笑うが人情。よしやインテレクト〔智識〕が高からうが。其品行が正しからうが。そこらハ一寸目にハわからぬから。玉石混淆して非評をするのが。我日本人の持前だアネ。

（『当世書生氣質』前掲、一四〇頁）

〔28〕小栗風葉「青春」初出『読売新聞』明治三八年三月〇三九九年一〇月、『山田美妙 廣津柳浪 川上眉山 小栗風葉集』日本現代文学全集一、講談社、昭和四三年八月

〔29〕同二二頁

〔30〕万龍は明治四〇年代に一世を風靡した赤坂の芸妓。明治四三年、箱根の洪水に遭ったところを東京帝国大学生・恒川陽一郎に救われ、のちに結婚した。（谷崎潤一郎『青春物語』初出『中央公論』昭和七年九月）昭和八年三月『谷崎潤一郎全集』第三卷、中央公論社、三四八〇三五五頁、平山蘆江『東京おぼえ帳』ウェッジ文庫、平成二二年二月、一三八〇一三九頁（底本・住吉書店、昭和二一年）等参照

〔31〕平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌「西洋」を読み替えて』新曜社、平成二四年二月

〔32〕小杉天外「魔風恋風」初出『読売新聞』明治三六六年二月〇九月、『小杉天外 菊幽芳 黒岩涙香 押川春浪集』大衆文学大系二、講談社、昭和四六年六月、一九三頁

〔33〕棚橋絢子「平たく云へば恋愛の二字に外ならずと存じ候」初出『新公

論』第二年七号、一〇頁、『新公論』複製版、ゆまに書房、平成六年九月

〔34〕徳富蘇峰「近來流行の政治小説を評す」『国民之友』六号、明治二〇年七月、一一頁

〔35〕同一四頁

〔36〕松子は若狭小浜酒井氏の藩士生咲某の長女なり。天保十四年に生る。（京都市立高等女学校編『婦人のかゞみ』金港堂、大正四年一月）

〔37〕田中彰「明治前半期の歴史変革観」『日本近代思想体系三 歴史認識』解説、岩波書店、平成三年四月、四九九頁

〔38〕厨川白村『近代の恋愛観』改造社、大正一一年一〇月、二五頁

〔39〕同一二七〇二八頁

〔40〕堂野前彰子『日本神話の男と女——「性」という視点』三弥井書店、二〇一五年七月、一〇一〇一二六頁

〔41〕福沢諭吉『尊王論』（初出『時事新報』社説 明治二年九月二六日）一〇月六日『福沢全集 卷五』前掲、二頁

〔42〕福沢諭吉立案、中上川彦次郎筆記『帝室論』飯田平作、明治一五年五月、三七頁

〔43〕田村栄太郎『幕末の志士 月形半平太』聖光社書店、大正一四年五月、八〇九頁

附記

引用文の漢字表記はすべて新字体に、変体仮名を新仮名に改め、ルビは適宜省略した。

また木戸孝允には「和田小五郎」「桂小五郎」「木戸貫二」「木戸準一郎」、幾松には「計子」「松子」等時期ごとの名乗りやその他変名があるが、論者による表記はすべて「木戸孝允」と「幾松」に統一した。